【事例紹介】

TUT グローバルハウスでの 生活を通じた学びとつながり

Learning and Building Relationships through a Life in TUT Global House

豊橋技術科学大学 グローバル工学教育推進機構 国際交流センター 特任助教 **蒲原 弘継**

KAMAHARA Hirotsugu

(Center for International Relations, Institute for Global Network Innovation in Technology Education, Toyohashi University of Technology)

キーワード：シェアハウス型混住宿舎、TUT グローバルハウス、グローバル技術科学アーキテクト、外国人留学生宿舎

はじめに

近年、大学におけるグローバル人材育成の場として日本人学生と留学生が共同生活を行う混住型宿舎が注目されている（牧田 2013）。日本人学生にとって留学生との共同生活は日本にいながら行える実際の海外経験に最も近い国際交流経験と考えられる。また、経済的な問題などから長期の留学に踏み込めなかった日本人学生にとって、留学生と長期に渡り交流できる機会が得られる混住型宿舎は魅力がある。一方、留学生にとっては日本での留学経験において日本の社会・文化について学ぶ機会としての日本人学生との共同生活は絶好の機会となりえる。

このような側面から見ると良いことしかないように見える混住型宿舎であるが、実際の運用においてはいくつかの課題が報告されている。出口・八島（2008）は、大学寮における留学生と日本人の対人関係を調査し、日本社会にある上下関係の実践や規範が留学生の寮コミュニティへの参加を阻んでいると指摘している。日本人特有の集団主義や高コンテクストといった社会文化は留学生の日本留学における適応上の課題としていくつかの研究（下田・田中 2007、Lee 2017）が指摘している。一方、山川（2013）は、寮生活において、「ルール」、「空間」、「時間」の 3 つの共有が日本人学生と留学生の友人関係を促進すると指摘している。加えて、正宗（2015）は、留学生が日本人学生と「対等な立場」

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

であることを認識することにより、留学生が共同体の一員としての役割を果たすことになったと述べている。さらに、こうした環境をいかに生み出すかについては、「自分たちで決めたルールの共有」、「異文化理解関係のカリキュラム」、「留学生との交流を推進するキャンパスの環境」などが寮に住む日本人学生の態度に影響しているのではないかと考えられている（正宗 2015）。したがって、このような社会文化的な課題は宿舎のみで解決できるものではなく、教育カリキュラムを含めた大学生活全体において取り組むべき課題といえる。このように、単に混住型宿舎を建設するのみならず適切な運営管理と教育プログラムが必要であることはいくつかの事例（望月（2013)、吉田（2015)）においても指摘されている。本稿では、こうした課題を念頭に、豊橋技術科学大学がスーパーグローバル大学創生事業「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成[1]の一環で取り組んでいる「TUT グローバルハウス」について報告する。

豊橋技術科学大学の特徴

豊橋技術科学大学は高等専門学校（以下、高専と記す）出身の 3 年次から編入学した学生が全学生数 2,087 名（2017 年 5 月 1 日現在）の約 8 割を占める国立大学である。こうした学生の出身高専の多くは学生寮を有しており、それらの高専の中には 1 年生は全寮制という高専もある。また、留学生数名が在学し、日本人学生と同じ寮生活を送っている高専もある。筆者も高専（大分高専）の出身であり、国際交流をするきっかけはその時の寮生活での留学生との交流を通じてであった。当時の高専では特に国際交流イベントが開催されるなどの機会はなかったが、高学年（4、5 年生）の時に個室に居住していたインドネシア人留学生と知り合い、インドネシア語-日本語のランゲージエクスチェンジをした経験はその後、今日の国際交流の経験に至る一つのきっかけになっている。このように、ある程度の国際交流と寮生活の経験のある学生が豊橋技術科学大学に編入学していると推察できる。また、全国の高専から学生が集まるため、学生の地域的な多様性が高いことも特徴の一つである。

現在、豊橋技術科学大学には 193 名（全学生数の 9%）（2017 年 5 月 1 日現在）の留学生が在籍している。他大学では中国、韓国からの留学生が大多数を占める一方、豊橋技術科学大学ではマレーシアからの留学生が最も多く 62 名（全留学生数の 32%）、次いで、インドネシア 33 名（全留学生数の 17%）、ベトナム 29 名（全留学生数の 15%）であり、東南アジア圏の学生が占める割合が多い。また、英語で修士や博士の学位が取得できる国際プログラムを開講しており、国費や国際協力機構（JICA）等の奨学金を得た留学生をはじめ、ドイツ シュツットガルト大学とのダブルディグリープログラムや中国 東北大学とのツイニングプログラム等による交換留学の留学生も多数在籍している。したがって、学部 4 年次で研究室に配属されるとアジアをはじめヨーロッパや中南米、中東、アフリカ出身の国際プロググ

[1] 豊橋技術科学大学 スーパーグローバル大学創成事業の詳細は、ホームページ（http://www.sgu.tut.ac.jp/index.html）を参照されたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ラムの留学生が研究室に所属している場合もある。こうした国際的なキャンパス環境をさらに促進させるスーパーグローバル大学創成事業「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成の取り組みが2014年からはじまっている。学内に新たにスーパーグローバル大学創成事業推進本部および推進室[2]が設置され、学内の関係する教職員と連携しながら事業が展開されている。そして、この事業の核となるのがグローバル技術科学アーキテクト養成コースの新設である。

グローバル技術科学アーキテクト養成コース

豊橋技術科学大学ではグローバル社会の多様性を理解し、異なる文化・価値観をもつ人々と共に課題を共有し、社会との接点の中で技術を捉えて課題を分析するとともに、解決策を創造し、判断と意思決定を行い、具体的な「ものづくり」に導くことが出来る人材の育成を目指している。このような人材を、豊橋技術科学大学では「グローバル技術科学アーキテクト」と呼んでいる。将来、こうしたビジョンを有して世界の舞台で活躍したい意欲のある日本人学生と留学生を同時に募集し、学部から大学院博士前期課程（修士）までの新たな特別コースである「グローバル技術科学アーキテクト養成コース（以下、GACと記す。）[3]」を2017年4月に新設した。

コース規模としては、学部1、2年は各学年15名、学部3、4年は各学年65名、博士前期課程は各学年65名の、総数290名としている。1年次入学は、入学定員80名のうち15名を本コースに割り当て、主にASEAN出身の留学生を想定している。一方、高専卒業の3年次編入生は、入学定員360名のうち50名を本コースに割り当て、その内、35名を日本人、15名を留学生としている。これにより、コースの学生総数は日本人140名、留学生150名となる予定である。

本コースは、1）グローバル・コミュニケーション能力、2）多様な価値観の下での課題解決能力、3)世界に通用する人間力、の3つの能力を養うカリキュラムで構成されている。本コースにおいては、専門科目をはじめとした講義をバイリンガル化し、グローバル・コミュニケーション能力を強化する。ここでのバイリンガル講義は、教科書・プレゼンテーション資料・板書などは英語で、講義・質疑・討議・試験は日本語と英語を併用し実施している。また、語学力の向上に向け、日本人学生に対する英語力強化および留学生に対する日本語力強化カリキュラムを提供している。さらに、グローバル実務訓練が必修科目となっており、本コースに所属する学生全員が学部4年次の1月から2月までの2ヶ月間（長期の場合であれば6ヶ月間）、非母国語圏の企業等で過ごすことになる。コース修了の認定要件として所定の単位を取得することに加え、日本人学生はTOEIC730点相当以上を、また留学生は日

[2] 推進本部については豊橋技術科学大学 ホームページ（https://www.tut.ac.jp/news/141105-4285.html）を参照されたい。また、推進室は室長である高嶋 孝明教授をはじめ、筆者を含む学内教員と関係する職員がメンバーとなりTUTグローバルハウスを含む一連の事業を推進している。
[3] 豊橋技術科学大学 グローバル技術科学アーキテクト養成コースの詳細は、ホームページ（http://www.sgu.tut.ac.jp/admission/index.html）を参照されたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

本語能力試験 N1 相当以上を取得することを定めている。そして、GAC に所属する学生全員に対して学部在籍時に混住型宿舎で生活する生活･学習プログラムを修了時のコース認定のための必須条件としている。

計画立案から宿舎建設まで

これまで、豊橋技術科学大学の大学構内には 600 戸を有した学生宿舎があり総学生数の約 3 割が居住していた。これらの学生宿舎には既に留学生と日本人が混住しており、フロアごとに共同のトイレや調理室、洗濯機がある。したがって、これまでの学生宿舎にはないコンセプトで GAC の学生全員が生活する混合型宿舎を約 180 戸新規に建設するにあたり、交流協定校であるニューヨーク市立大学クイーンズ校にあるインターナショナルハウス「SUMMIT」[4]を参考にして、シェアハウス型混住型宿舎を計画するに至った。

具体的な建物の計画コンセプトをさらに明確にするため 2015 年 2 月 18 日に学内コンペを実施した。その結果、最優秀賞は、建築･都市システム学課程 3 年次の学生からの提案である「縁 ～つながり～」が選ばれた[5]。このコンセプトを活かして、5 人で 1 ユニットをシェアし、1 棟 6 ユニットで 30 名収容の建物 6 棟と集会棟 1 棟（写真 1～3 参照）の建設を計画した。これらの建物は、キャンパス内の学生宿舎エリアに配置することとし（写真 4 参照）、最初の 2 棟と集会棟 1 棟が平成 29 年 3 月に完成した（写真 5 参照）。既に、2017 年 4 月より入居を開始しており、平成 30 年度末までに残りの 4 棟を建設する予定である。

写真 1　フロアープランと生活イメージ

[4] ニューヨーク市立大学 クイーンズ校 Summit Apartment の詳細は、ホームページ（http://queenscollegehousing.com/）を参照されたい。
[5] 学内コンペの詳細は、豊橋技術科学大学 ホームページ（https://www.tut.ac.jp/news/150224-4488.html、http://www.sgu.tut.ac.jp/student-life/news/67.html）を参照されたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

写真 2　広がるつながり「縁」をイメージした建物配置

写真 3　エリアプラン

写真 4　豊橋技術科学大学の航空写真と TUT グローバルハウスの位置

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

写真 5 TUT グローバルハウスの外観

組織運営と宿舎プログラム

TUT グローバルハウスの運営をはじめるに当たり、ハウスマスターを国際公募により募集し、2017 年 2 月から 1 名（日本人）が勤務している。ハウスマスターは、平日の午後から夕方に TUT グローバルハウスの集会棟内に設けた事務室に勤務し、建物管理に関する一般的な事務対応とレジデントアシスタントとのミーティングや業務日誌の確認等を行っている。また、レジデントアシスタントは各ユニットから 1 名が選出され、ユニット内での共同生活等の取りまとめ役を担っている。さらに、各棟のレジデントアシスタントの中から 1 名を棟長に選出し、棟長を中心としてハウスマスターとレジデントアシスタントが参加する TUT グローバルハウスの運営に関するミーティングを毎月開催している。宿舎内のルールに関しては、レジデントアシスタントを中心としたユニット内の話し合いによって各自で決めるようにしている。ここでのルールは単に掃除の分担やゴミ出しといったことだけではなく、週の何日かを英語で会話する日とするといった学習面でのルールを定めているユニットもある。

これまでに、報告されたユニット内で起こった問題としては、ハラルに関するトラブル（例えば、使用する食材に関する誤解等）や共有スペースの光熱水費に関する要望（例えば、水を使いすぎないでほしい等）などがある。こうした問題も各ユニット内での話し合いやハウスマスターを交えた話し合いなどにより対応できている。また、こうした問題にいかに対応するかも学生にとっては一つの「学び」といえる。TUT グローバルハウスにおいては、こうした日常生活で起こる問題への対応に加え、学内イベントの開催や地域との交流までを生活・学習プログラムとして学生に課している。2017 年前期の学内イベントとしては、GAC 学生全員が既存の国際交流センター主催の学内国際交流イベントである世界の EXPO2017（2017 年 6 月 30 日実施）の運営の一端を担っている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

まとめと今後の展望

本稿では、豊橋技術科学大学が大学全体で取り組んでいるグローバル技術科学アーキテクト養成コースとそのコース生全員が生活するTUTグローバルハウスの取組みについて紹介した。気になる学生達の声であるが、豊橋技術科学大学の広報誌である「天伯」にハウスマスターとTUTグローバルハウスの棟長やTUTグローバルハウスで生活している留学生のコラム（山崎・本保 2017、Lim 2017）が掲載されているのでそちらをご一読いただきたい。また、コースを開設したばかりということもあり、留学生の獲得は目下の課題である。2018年4月からはGACの1年次15名が入学し、TUTグローバルハウスの活動もいよいよ本格化を迎える予定である。今後、学生には、将来、世界のどこにいても連絡を取り合うような親友としてのつながりをTUTグローバルハウスでの共同生活を通じて築き、世界の舞台での活躍を期待したい。

参考文献

Lee, J. S. (2017). Challenges of International Students in a Japanese University: Ethnographic Perspectives. Journal of International Students, 7(1), 73.

Lim, J. Y (2017) New Chapter in My Life at TUT、天伯、144(26) (https://www.tut.ac.jp/tempaku/04/index.html#p10363)

下田薫菜、田中共子 (2007) 在日外国人留学生の感じる文化間距離：集団主義-個人主義、高-低コンテクストの観点から、留学生教育、12、pp.25-36.

出口朋美、八島智子 (2008) 実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係、多文化関係学、 5 、pp.33-47.

牧田綾子 (2013) グローバル人材育成の場としての 「国際寮」、カレッジマネジメント、31(6)、pp.6-11.

正宗鈴香 (2015) 寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究-国際寮の教育的機能の可能性-、麗沢大学紀要、98、pp.63-72.

山川 史 (2013) 寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築、異文化間教育、38、pp.100-115.

望月由起 (2013) 学生寮の機能多様化と大学のストラテジー、カレッジマネジメント、31(6)、pp.24-29.

山崎正義、本保雄太 (2017) TUT グローバルハウス始動、天伯、144(26) (https://www.tut.ac.jp/tempaku/01/index.html#p10335)

吉田千春 (2015) 留学生宿舎から混住型学生宿舎へ-教育寮への転換に向けて-、留学交流、54、pp.9-23.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.